

工場解放という地域戦略（2025・10・20）

観光というと普通は自然景観や歴史遺産の見物を想像するが、最近は産業施設の見学が流行している。フランスでは工業製品の輸出振興を目的として一九五〇年代から工場などの見学を推進してきたが、日本でも二〇〇〇年代になり工業生産の中心地帯である愛知県内の生産施設を対象とする観光が登場し、国内だけではなく国外の人々にも人気になってきた。

企業の生産能力の秘密が集中している工場を一般に公開することはマイナスになりそうであるが、方向転換の背景は伝統産業の分野で技術や生産を継承する人々が縮小傾向にあるという危機意識である。そこで大学が入学者数を確保するためにオープンキャンパスを開催するのと同様にオープンファクトリーが登場した。

そのような背景から、オープンファクトリーは巨大企業よりも中小企業が熱心で、一社単独ではなく、地域の何社かが共同で推進するようになっていく。これまでも工場見学は修学旅行などで実施されていたが、最近は外部の人々の工場見学が企業の社員の意識改革を推進する手段にもなっているという相違がある。

実際、外部の人々が見学するようになった結果、職人が服装や作業に気配りし、工場内部の整理整頓が実施され、仕事への意欲が向上するなどの波及効果も発生している。さらに従来はそれほど関心のなかった周辺地域の工場の動向も意識するようになり、協力して新規の事業を開発するという相乗効果も登場している。

正確な統計は存在しないが、日本政策投資銀行の今年の調査によると、企業単独ではなく地域が一体となってオープンファクトリーを実施している場所は一〇年前には全国で一五ヶ所程度であったが、最近では四倍以上の六五ヶ所に増加しており、人口も産業も大都市圏へ吸収されていく地域の対抗戦略になるという期待もある。

以下に数例を紹介したい。新潟県五泉市はニット企業の集中が国内最大の地域であるが、輸入製品が増加して危機意識が発生し、二〇一六年から市内のニット企業が一〇社以上参加して「五泉ニットフェス」を開催し、最近では約五〇〇〇人が工場や同時に開催されるファッションショーの見学に訪れる人気事業になっている。

富山県高岡市は漆器、鋳物、仏壇など伝統工芸の歴史がある都市であるが、その振興のため2012年から江戸時代以来の伝統ある街並みを会場に、伝統工芸を生産する一五社が参加する「高岡クラフト市場街」を開催している。会場では伝統工芸の体験もできるため人気があり、毎年、二万人以上が参加する事業になっている。

栃木県鹿沼市は江戸時代初期に日光東照宮の造営のために全国から腕利きの大工や職人が集結した場所であり、その伝統から多数の木工や金属加工の工場が集積している。そこで二〇一八年から市内の数一〇社の企業の工場を見学する「かめまオープンファクトリー」を開催し、普段は見学できない工場を解放している。

日本の製造業就業者の比率は一九七〇年代の約三八%から最近では約二二%に減少している。情報社会の進展の結果であるが、世界が流動する現在、自国で必要な物財を生産できる能力を一定以上保持することは必須である。そのような視点から、社会を維持している製品を製造している中小企業を地場産業の視点から支援し維持することは重要である。